10 月 26 日 メッセージ

聖書：創世記 2 ： 4b － 9, 15 － 25

「ふさわしい助け手」

坂口志文特任教授（大阪大学）のノーベル賞受賞会見は夫婦同席。ニュースの見出しにも「二人三脚でノーベル賞」。やっと時代が変わってきました。一昔前はすぐに「内助の功」と言われていました。しかし、この言葉は家族を持ち上げているようで、実は「男性が外に出て活躍して、女性が裏側で支える」というステレオタイプな家族像を押しつけています。そこからはみ出している家族は無視されるか、部分的に切り取ってその枠に押し込めようとされてきました。

もちろんそれは日本の社会が生み出してきた構図です。社会は変わっていくもの。また、時代に即して聖書の言葉も受け止められ方が変わっていきます。

「神である主は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた。人はこうして生きる者となった。」(創世記 2:7)

人はそれ自身では価値を持たない土の塵から造られたと聖書は記しています。ヨハネの黙示録でも「あなたは万物を造られ／万物はあなたの御心によって存在し／また造られたからです。」(ヨハネの黙示録 4:11)と、全ては神の御心の内にあると言われています。

神が人を造られた時、人は一人でした。「神である主は言われた。『人が独りでいるのは良くない。彼にふさわしい助け手を造ろう。』」(創世記 2:18)。「助け手」は英訳聖書では、「a helper」(New American Standard Bible)、「an help」（King James Version）となっています。日本語の辞書で「ヘルパー」を引くと「手伝い。助手。特に，家事などの手伝いとして派遣される人。」（大辞林）とあります。どこか「一段低く見ている」ように感じるのは「内助の功」に引きずられているせいでしょうか。

実際、キリスト教を中心とする社会でも長らく男性優位の社会が形成されてきました。時には聖書の言葉を持ち出して「女は、教会では黙っていなさい。女には語ることが許されていません。」(コリントの信徒への手紙一 14:34)などとも言われてきました。

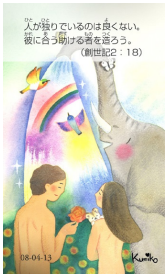
実はこの節はパウロの言葉ではなく、後代（6 世紀）の加筆であると言われています。パウロの時代には多くの女性宣教者がいました。しかし、典型的な男性社会であるローマ社会に受け入れられるために、教会は女性の自立性とイニシャティブ（主導権）を犠牲にしたのです。

「人はあらゆる家畜、空の鳥、あらゆる野の獣に名を付けた。しかし、自分にふさわしい助け手は見つけることができなかった。」(創世記 2:20)。これは「家畜や空の鳥、野の獣には価値がない」という意味ではありません。人は人と出会って初めて、人として成長することができるという意味です。

老若男女、ありとあらゆる人と出会い、その関係の中で人は生きています。「多様性」とは、「マジョリティー（多数派）がマイノリティー（少数派）を認めてあげる」ことではありません。そもそも世界は多様に造られている。そのことを知った上で、「自分も神の造られた『多様性』の中の一人なのだと気づく」ことです。その視座に立った時、「あなたと私は違う存在である」ことをきちんと認識できるようになるのです。

自分とは違う他者と出会うことで、改めて「自分」を発見することができます。自分の強みも弱みもわかるようになります。同時に、人の力を借りて弱みを強みに変えたり、足りないところを補い合ったりできるようになります。そして、互いに支え合い、成長し合っていくことができるのです。これが互いに対等な「ふさわしい助け手」なのです。

時には「ふさわしくない」関係もあるかもしれません。その時、「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」(マルコによる福音書 10:9)との言葉を鵜呑みにして我慢するのは「ふさわしくない」。どうすれば一層「ふさわしくなる」かを共に考えることができるように、しかし、それも難しいならば距離を置くのもまた「ふさわしい」関係でしょう。



「その声は全地に／その言葉は世界の果てにまで及んだ」(詩編 19:5)。神の言葉は今日も生きています。差別のない、全ての人が豊かに生きられる社会を目指して、今日も誰かの「ふさわしい助け手」でありたいと心から願います。